

車いすバスケットを通して

4年 岡田さん

私が車いすバスケットボールに行くようになったきっかけは、お父さんです。お父さんが車いすバスケットに参加していたので、

「私も行きたい！」

と、おもしろそうだったので連れていってもらいました。

初めて車いすバスケットの練習に行った時は、とてもおどろきました。おもしろそうと思ったのは、行くまでだけで、実際に見ていると、車いすは、あたり前かもしれませんが、手だけで動かすからです。しかも、車いすを動かすだけでなく、車いすに乗りながらドリブルをしたり、シュートをしたりするからです。時には、車いす同士がぶつかって、転んでしまうこともあります。そんな時は、一人では起き上がることができないので、同じ車いすの人や、足が動く人、みんなで協力して起きあがるのです。一つ一つがとても大変なことに気がつきました。

そこで、車いすバスケットの人に、生活していて大変なことがないのか聞いてみました。すると、ある人は、「だんさがあるところは通りにくいんだよ。階段は登るのがむずかしいね。」と話してくれました。私は、自分の家の周りを考えてみました。家の周りには、そっこうがありそれはガタガタして、ふむたびに段差になることを思いました。私が通う学校には、階段があり、車いすでは登ることができないことも思い出しました。車いすで生活する人にとっては、私が当たり前に通っている道も、当たり前に通っている学校も当たり前ではないのです。

練習の合間に、車いすに乗せてもらいました。最初はとても楽しくて、ぐいぐい車を回しました。でもすぐにうでがいたくなりました。うでだけで動かすと、あまり使わない筋肉なので、力が入らなくなり、動かすのも大変でした。また、止まるときは、わきのレバーをひきます。何回もやっていたので手の皮がむけてしまいました。

少し乗っただけでもうでがいたくなったり、皮がむけたりしてしまうのに、毎日乗っていたら、もし段差があつたらとても大変なことなんだと思いました。

「大変な時はどうするんですか？」

そう聞いてみると、

「そういう時は、まわりの人に相談するよ。それに、こまった時は知らない人も声をかけてくれて助けてくれるんだよ。」

と教えてもらいました。その言葉で、私にもできることがあるかもしれないと感じました。私にできることは、こまっている人がいたら、はずかしがらずに手をかしてあげることです。

最後にこんなことも話していました。

「しょうがい者やお年よりも住みやすい、やさしい町にしてほしいな。」

私は車いすバスケットを通して、自分にとってあたり前ではない人がいること、こまっている人がいたら手をかす勇気をもつことが大切なことがわかりました。そして、将来、いろいろな人を助ける人になりたい、そう思うようになりました。